

説教の課題《誰に》
——《コミュニケーション》《トランスフォーメーション》の
観点から——

安村仁志

「説教」が成立するためには、文字通り、語られ・伝えられるべき《教え》があって、その《教え》を説く者とその《教え》を聞く者がいることが前提となる。且つ、語られた《教え》が確実に伝わり、聞いたものがそのことによって《つくり変えられる（トランスフォームされる）》ことで完結する。

これは一般的な定義であって、仏教を始めとして他の宗教の説教、さらには学校や家庭などでの説教にも通ずることである。その意味で、そうした「説教」に《キリスト教の》という限定が加わるときには、神のことばが、召された人間を通して、聖霊の働きの中でありのまま語られ・伝えられ、聞いた者が救われる・さらに福音の恵みに与るということとなろう。さらに、《福音主義教会における》が付加されるとき 2011 年度の研究会議のテーマとなる。

今回の研究会議では、この枠組みの中で、説教が「コミュニケーション」と「効果（トランスフォーメーション）」の要素を念頭に入れていくつかの角度から吟味されたが、その場合この二つの要素をめぐっては、一般的な「伝達行為」に関する論点が参考になる可能性が生まれてくる。すなわち、説教をコミュニケーションの要素から点検・吟味する場合、コミュニケーションが成立する要件を探っていくことが必要であり、その結果として一般的なコミュニケーション行為をめぐる論点も明らかになるのであって、今回のテーマに参考になるということがある。その際、コミュニケーションが完結するためには何らかの変化

が伴われるはずである。本論においては、こうした文脈において、説教に関し《誰に》が扱われる。論点を整理することから始めたい。

I. 「コミュニケーション」の観点から

「コミュニケーション」なる語には未だ的確な邦語がなく、communication がそのまま発音され使用されている。それはかなり複雑な意味合いが込められているからであろう。国語辞典の説明でも、「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと」(広辞苑)、「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと」と。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行う。」(大辞林)などであり、後者においては前者と全く同じ定義をしたうえで、それを行う手段が示されている。共通する部分の「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと」自体に、単なる一方的伝達行為ではないことが示されており、この行為には複数の主体があることが前提とされている¹。また、一定のアクションとリアクションが含意されている。つまり、人=A から人=B へ情報が伝達されること、その結果受け手(本論でいえば「聞き手」と送り手(同「語り手」)の間に「共通のもの」「心の通い合い」が生まれることである。「語り手」と「聞き手」の関係に関する問題として、両者の《関係》、《双方性》が考慮されなければならない。《誰に》というところで考える場合は、基本的に「語り手」側から見た問題となろうが、その視点で整理してみたい。

A. 《誰に》をめぐる論点(伝達行為が成り立つ条件に関連した論点)

1. 対象(聞き手)があるか・ないかが大前提となる。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことの

ない方を、どうして信じて信じていることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遭わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことのお知らせを伝える人々の足は、なんとりっばでしよう。」(ローマ 10:13-15) ①「語り手」がいるから「聞き手」が生まれるのか、「聞き手」がいるから「語り手」が語るのが

《宣教》ということでは前者であろう。

②「語り手」がいて、「聞き手」がいる

もっとも基本的な状況であるが、生活時間が多様化する今日の社会においては、「共通した時間」がもてるかどうかが大きな課題となっている。

本論からすると、礼拝・集会で「説教」が行なえることになり、その場合に、「語り手は」「聞き手に」「何を」「どのように」語るか・伝えるかが問題になる。

③「語り手」がいても「聞き手」がいない

これに関しては、聞く者自体がいない場合と《求めて聞く》者がいない場合が想定されるが、広く現代の宗教の実態、それに基づく現代人の宗教に対する対応・感覚など現代の文化状況が関係する。

礼拝・集会で「説教」は行なえても、コミュニケーションとしてとらえる本論からすると、「説教」にはならない。

④「語り手」がいないが、「聞き手」はいる

正確には「聞きたい」と願う人がいるのに「語り手」がいないというケースで、もっとも深刻な問題である。一方、語り手がいなくて聞きたいという事柄に、微妙なところでニュアンスが異なるが、聞きたいと願う人がいて、語る人もいられるけれども、「真に」語る人となっていない(言い換えれば、聞く者の求めに応えられない、あるいは義務的・形式的に語っているにすぎないようなケース)という意味で「語り手」がいないということもあり得る。これは説教者の資質にかかわる問題である。

プロパガーの語り手(牧師等の説教者)がいなくとも、何らかの形で代行する語り手(複数の可能性も)がいる場合には、形式的には「説教」が成立する可能性があるが、それはあくまでも代行者が行うものが「説教」である限

¹ communication はラテン語 communicationem (主格形 communicatio) に由来する語で、それは動詞 communicare ("to share, divide out; communicate, impart, inform, join; unite, participate in"などの意) から派生し、"common", "public"を意味する communis が元であることから "to make common" が原意となる。

りにおいてである（「証」や「奨励」の場合は異なる）。しかし、こうしたケースは無牧状態に起こりえる。

⑤「語り手」がいないから「聞き手」も生まれない

論理的には必然の結果であるが、今日説教者・伝道者の不足が叫ばれる状況（特に地方）において深刻な問題となりつつある。

本論からすると、礼拝・集会での「説教」の可能性がない。

2. 対象（聞き手）の姿勢に関し、コミュニケーションの要素を入れて整理する

a. 関心の度合い

①関心がある＝反応（応答）したいと思う状態が強い

語られることについて「語り手」と「聞き手」にかなりの程度共通の基盤がある場合で、本論からすると、聞き手としてはまず信徒が想定され、語り手（説教者）とのあいだに聖書の知識と信仰の共有があるということになる。つまり、語られることをめぐって「語り手」と「聞き手」に共通の基盤があるケースである。

また、求道者が「聞き手」である場合にも、語り手（説教者）とのあいだに聖書の知識（多寡の幅がある）の共有はそれほどないけれども、《人生》《生きる》ことにおいて道を求めているというアクティブな関心があることが想定される。

一方、語られることについて「語り手」と「聞き手」に相反する関係があり得る。聞き手が積極的無神論者のような場合で、聖書の知識がある・なしにかかわらず、意識的に神に否定的な立場、あるいは神を否定する思想を有するケースであるが、現在では遭遇することが珍しくなってきた。また、他宗教の信徒・思想家でキリスト教・聖書に批判的な立場を有するものも想定され得る。

②特に関心があるわけではない＝反応（応答）についてニュートラルである場合

語られることについて「語り手」と「聞き手」の関係がさまざまな意味でニュートラルなケースで、反応の可能性はあり、その意味で可能性の掘り起しが説教において求められる。もともと積極的関心はないものの、人

に勧められて教会に来るような人が想定される。この場合、再び来る可能性は保証されないことからすると、「説教」の一回性を考慮する必要があるのではないか。²

③関心がない＝当面、反応（応答）が期待できそうにないといえる場合
寝てしまったり、帰ってしまうこともあり得たり、語られることについて「語り手」と「聞き手」との間に共通の基盤がほとんどないケースであるが、目覚めれば反応の可能性はあるので、聖霊の働きに期待して可能性の掘り起しをする説教となることが求められ、ここでも「説教」の一回性が考慮される必要があるだろう。

b. 対象（聞き手）の状況、《場》の問題について整理する（《メディア》の問題も関係する）

①「聞き手」が「語り手」の前にいる＝対面型、face to faces

「聞き手」の多寡により《場》の大きさも変わるが、概ね、「語り手」は「聞き手」がどのような様子で聞いているかをダイレクトに見る・感じることができる。

②「聞き手」が「語り手」の前にいない

「語り手」にとって「聞き手」がバーチャルな面もある。本論からすると、テレビ・ラジオ・テープで視聴している人たち、パソコンで視聴している人たち、「語り手」の書いたものを読む人たち、聞きたくても聞かれない人たち（病氣・高齢などで）などが想定される。聞き手、読み手はその場にいないため、何らかの要素により視聴が中断されることがあり得るので、集中性が保たれるかについては保証がない²。但し、メディアによつては、繰り返し聞き・読むことができる。また、聞くこと、読むことにおいて個人的自由或いは自発性が比較的担保されやすい面があり（聞きたくない・読みたくないものは聞かない・読まない）、その意味では一定の効果が期待され得る。《コミュニケーション》ということであれば、「説

² これらのケースについて、ロイドジョーンズは説教者と会衆との間に直接的接触がないことを理由の一つに入れて否定的に見ている。『教会とは何か』（いのちのことは社、2005）、59頁

B. コミュニケーションが成り立つ前提としての《伝達行為》に関して《誰に》にかかわる論点

a. 伝達媒体としての言語に関連した論点

これはコミュニケーションの達成度と関係する。伝達は基本的に《言語》よってなされることを前提に、まず語り手と聞き手の言語が同じである場合を想定すると、以下の問題があがってくるであろう。

①語能力・言語感覚の問題

「語り手」と「聞き手」が《語彙力》や《言語》による表現に対する感覚において近い・遠いかということである。今日、一般的には固有の日本語の語彙力が低下している。また、非常に顕著な現象として、表現の仕方がダイレクトになりつつあることである。間接的、比喩的表現は伝わりにくくなっているということである。

②用語の問題

「語り手」と「聞き手」の間に《ことばの時代性》のギャップがないか、それが大きい小さいかは常に問題になってきたことであるが、今日では情報革命によりギャップが生まれるスピードと幅は確実に増大している。和製英語、略語を含む新語が生まれ続けており、一般的には若い語り手と年長の聞き手の関係において問題が顕著である。日常生活のさまざまな面で年長世代は若年世代の使用することばを理解することが難しい（いつの時代にもあったことであるが、その程度は増してきている）うえ、同じ世代であっても主に活動する、あるいは所属する《場》特有の語が理解できない局面に遭遇することが多くなっている。そうした状況においては、「語り手」が「聞き手」の反応をつかみきれない問題が大きくなる。

③文化的背景の問題

「語り手」と「聞き手」の間に、話題・伝達方法などに関連して、《文化》的背景や社会的な影響を受けている度合いの差異がないか・あるか、小さいか・大きいのかの問題である。

文化・社会の影響という要素は、大きな問題だと思われる。それは無意識のうちに受けているものであって、なかなか気付かないものであるだけに厄介な問題である。ことさら、今日はメディアの発達・多様性もあって、

教」の臨場感がない、その場で反応を感じ取れない問題が一方にあり、他方書物よりは生の雰囲気を感じることができるとともに、繰り返し視聴できる可能性、後に反応が示される可能性の両面がある。

また、今日わが国は《超高齢社会》となっており³、移動に不自由な事情のある人たちが増えていく一方、メディアの発達によりある程度、否これまでは異なった形で補われる可能性が拡大している。従って、そうした環境にある今日においては、誰が、誰に、どのように、どういった内容で説教するかに関し、本ポイントは重要なテーマとなり得るであろう。書物になった説教についてもこの範疇にある。

③対象の資質

聞き手の年齢、性別、国籍、キャリア、健康状態なども考慮されるべき要素といえよう。これらの「誰に」の対象としての聞き手の資質に関する要素は一般的に複雑に重なり合っており、実際上対象を特定した集会は別にして、礼拝の説教などでは男性・女性、若者・高齢者、日本人・外国人、健康な人・病弱な人が同一の場において聞いている⁴。これらの要素の多様性に完全に応えることは不可能に近く、それらを超えた聖霊の働きを祈る以外にはない。ただ、語り手の配慮は必須である。ジェネレーション・ギャップは、のちに触れるように、語彙、知識において顕著に表れ、通じない“ことば”、“概念”を多用することは慎むべきであろう。また、個別のフォローアップも考慮されるべきであろう。

³ 全人口に占める65歳以上の人口が7%を超えると「高齢化社会」、14～20%だと「高齢社会」、21%を超えると「超高齢社会」とされ、日本は2012年9月16日現在で総数が3000万人、比率にして24.1%に達した。

⁴ 聞き手がかなり均質であると考えられる大学（入試を経て一定の学力が担保され、且つ一定の動機をもって入学してくる学生が聞き手となる）でさえ、今日では様相が異なってきたおり、対応が求められていること、進学率の上昇（50%を超え「ユニバーサル化」した段階にある）、偏差値に影響される度合いの高まりで志望動機・勉学に対する積極性の低下が大きな問題となりつつある。「リメディアル教育」と呼ばれる準備教育がおこなわれるところとなっている。

ある文化的傾向が広く・早く伝播する。大量の情報愛好と好まざるにかかわらず飛び込んでくる。地球的規模においてでもある。《キリスト教的》フィルターをかけることはなかなか困難である。教会に関しても、個人の信仰生活、聖書の読み方、解釈、伝道、交わりのあり方、礼拝、そして説教に至るまで、知らず知らずのうちに影響が忍びこんできているといえよう。恐らく10年前のそれらと比べてみてみてもかなり変わってきているであろう。

社会、文化の影響を受けやすいのは、一般社会や非聖書的文化に近いのは、まだ教団に与っていない人々たちであろうが、それほど単純ではないであろう。信徒・牧会者も程度の差こそあれ同様であろう。しかし、説教に關して《誰に》がテーマとなる場合には、まずは影響をより強く受けるのは「聞き手」である信徒・求道者の方であろう。説教者はその点を念頭に入れなければならない。

II. 「説教」と一般の「講義・講演」との異同

キリスト教・福音主義教会における「説教」が一般の「講義・講演」と基本的に異なるものであることはいうまでもない。救われ、召された牧師・伝道者が信徒に対して礼拝等で行なう説教、未信徒に対して行なう伝道的説教は、人の知に働きかける教授行為（講義・講演）ではなく、靈感された神のことがばが聖霊の働きの中で人の魂に語られるものである。その意味において両者には大きな相違点があるが、先にも述べた通り、「語る者」と「聞く者」がいて成り立ち、「語る者」には「聞く者」に《話し・伝えるもの》があり、「聞いた者は聞く前とでは《変化》することが目的化・期待されるという形式的要件には共通するものがある。且つ、その伝達行為においては「語る者」が《話し・伝えたいもの》が「聞く者」に《届き・伝わらなければならぬこと》のものと、《どのように》という要素が大切なことになってくる点でも共通性がある。

論者は大学で一般の講義を行なっている者として、こうした文脈において、今日の大学での動きをご紹介しながら、教会の「説教」を考える話題を提供したい。

今日、大学に求められていることを挙げると、同年齢の50パーセントを越え

る者が大学で学ぶという「ユニヴァーサル化」した状況⁵、グローバル化した時代ににおいて「学力の質保証（向上）」がかなり強く求められている。そして、その背景に18歳人口の通減化の見通しがあり、大学の生き残り問題がある。また、経済の不安定化のもとに学生の就職状況の厳しき問題もある。シラバスを含めた教育情報の公表、教員（集団）の教育力向上を目標とするFD（Faculty Development）が義務化されている⁶。大学・学部、そして教員として、《何を》《どのように》教えるか、《学生とどのように向き合うか》《学生の声にどのように対応するか》といった、学生＝消費者に近い構図で課題が突きつけられている。その中で、教員は自ら行なう講義の聞き手（学生）を意識しながら、より良い講義が成り立つべく、学生からの授業評価をも受けながら自己点検し、改善に努めることになっている。また、学生が確実に力をつけ、社会に出て行けるようにするための《環境》の整備（授業環境の改善・キャリア支援など）が具体的に進められている。

大学でのFD活動における課題をいくつか挙げ、それを本論に当てはめてみたい。

a. 入試形態の多様化に伴う学生の学力・知識量の幅への対応

講義を受ける者の学力・知識量などの基礎的前提が一定しないとすれば講義する者の困難は大きく、理解させるための《方策》を考え出さねばならな

⁵ アメリカの社会学者マーチン・トロウ（Martin Trow）が提示した18歳人口の大学進学率に関する三段階区分によれば、15%未満が「エリート段階」、15～50%が「大衆（マス）段階」、50%を超えると「ユニバーサル段階」とされる（日本も53%程度となっている）。トロウは、ユニバーサル化に伴って着目しなければならない点をも指摘するが、本論に關係するとみられるものを挙げてみる。学生の進学動機、カリキュラムや授業形態、教員・学生間の関係、大学教員の間の関係、などである。

⁶ 2008年4月1日に大学設置基準が改正され、「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」とFDが義務化された（それまでは「努めなければならない」であった）。また、学校教育法施行規則等の一部を改正する2010年6月15日付けの文科省省令により、「大学は、次の教育研究活動等の状況についての情報を公表するものとする。」として、教育研究上の目的、授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業計画と、学修成果に係る評価基準等の公表が義務付けられた。

い。その結果、伝えるべきものが量・質ともに低下することが起こり得る。

説教にあてはめてみると、聞く者が信仰の有無、信仰歴、年齢、関心度、聖書そのものへの親しみ度などさまざまな点で多様であることは一般的なことである。これに加えて今日問題になる点に、積極的求道者が少ないこと、読書量の低下に伴う知識欲の低下、感覚的なものの方が好まれる傾向がみられることから、語られ・伝えられるメッセージの質にも影響が及びはしないかということがある。説教時間も短くなりつつあり、語られるものの量的減少にもつながり得る。それに伴い“分かりやすく”という要素を意識することが多くなる。“分かりやすく”ということ自体は重要な要素であるが、過度に意識が及び、そのための配慮の方に多くのエネルギーがとられるとすれば問題であろう。しかし、これは現実化しているように思われる。「コミュニケーション」、「トランスフォーメーション」を加味して考える場合、一つの論点になりうる。

ではどうすればよいか。“分かりやすく”を心がけつつも、そのことに過度に配慮してテクニカルに対応することは避け、語るべきことの質を落とすことなく、ご聖霊の働きを熟く期待し、祈って臨むことであろう。ただ、対象者を絞って話し得るようなまめな配慮は考えられうる。

b. 教員の授業力の向上

上記に関連して講義が届きにくくなるならば、聞かせ、理解させる授業力の向上が求められるのは当然の帰結であり、今日かつてと比べればそのために多大なエネルギーを費やせねばならないところとなっている。

福音の伝達者としての説教者に当てはめてみるならば、《伝える》力を磨く必要があるということになろう。ただ、それはこの場合伝えるべきメッセージをいかに的確に届くよう外的要因を高めるかということなど、ごく基本的なことばかりとした声で、はつきりと伝えようとすることなど、とても基本的なことであっても注意を払うことである。また、伝達行為である以上、努めて筋道立てて話すことが必要である。一般的読書などにより説教の際に用いる挿話の材料を蓄えておくこともあてはまることであろう。また、しっかりテキストを読み込み、十分な備えをして説教に臨むことである。しかし、これら

は伝達行為としての必要条件であって、それで十分なのではなく、祈りによって聖霊の働きを期待してのことである。

c. 授業内容の明示

一般講義の場合、15回がセットで連続して講義され、段階を踏んで進められていく。それが明示され、備えをして受講させるべく、シラバスをしっかりと書くことが求められている。

説教においては、連続講義のような場合にテキスト箇所区分と主題を明示しておくことにつながる。毎回テーマが異なる場合は、ことさらに配慮が必要である。聖書箇所・主題を予め示すことは一般的に行われているが、関連聖書箇所、読んでおいたほうがよい書の紹介など一歩進んだ「備えの勧め」が考えられ得る。

d. 大学で学んだことの成果の可視化 (大学で学んだことによる「変化＝成長」の可視化)

学んだことが見えるよう現れることが求められるが、それは正当なことなのかどうかを含めて大学は当惑している。理系の場合、JABEE という大学、高等専門学校等の高等教育機関の技術者教育プログラムの審査・認定を行う非政府組織が技術者教育プログラムの審査・認定を行うシステムができてい⁷。しかし、文系の場合戸惑うところ大であるが、それでも4年間の学士課程の学びを通して、所属した学部専門知識、教養など何を身につけたかを就職活動等において示せるようにしなければならないのである。そのためにはカリキュラムが学びの段階、そのルート等において見えるようにしなければならないとされる (カリキュラム・マップ)。

説教がなされる分野の一つ、宣教においては、これとこれを聞けば救いに導かれるといったルートなどあり得ない。しかし、連続して聞く者がいる礼

⁷ JABEE (Japan Accreditation Board for Engineering Education 日本技術者教育認定機構) は国際的に通用する技術者の育成、それに必要な教育の質保証などの社会的ニーズを背景に 1999 年 11 月に設立され、技術者教育の質保証に刺激を与えている。

拝においては、一定の教育的な面があり得る。説教を聞く・聞き続けることで、「聞き手」が回心・受洗、確信・信仰の深化に確かに導かれるよう祈り求めるとともに、一定の“カリキュラム”的要素も取り入れることは考えられる。

e. 講義時間以外の対応（オフィス・アワーなどを通じて質問等へ対応する）

今日の大学では、教員は週に1〜2時間時間を取り、研究室等で学生の面会・質問の受付など行うことが一般的になっている。授業のフォローアップに通じるものであり、教員と学生のコミュニケーションの場の設定である。

説教がなされたあとそのまま解散、帰宅でいいかの問題に通じる。聞き手には説教を聞いて分かったところ、質問したいところ、導かれたところを他の人と分かち合いたいと思う心は当然起ってくるものである。聞き手へのフォローアップを、愛をもって時間を割いて丁寧にすることは必要であろう。説教者はメッセージを伝える際、「誰に」に関して、反応とそれへの対応を含めて聞き手を意識する必要がある（これこそがコミュニケーションである）。聞き手が説教を聞いてつくり変えられることにおいて説教が完結することを大切にすべきである。

f. 90分の講義の新たな在り様の模索（90分の講義を45分×2講義にするなどして授業効果を上げる）

従来の1講義が90分というシステムの再考がなされつつある。聞き手である学生の集中力が90分維持できないという問題と、科目の性質によっては（語学など）、週に一度90分の授業を行うよりも45分の授業を2度行う方が効果的ではないかという議論である。一方、ゼミなど集中して議論が続ける場合、90分では足りないこともあり得るため、90分を2コマ続ける（180分）こともあり得る。

礼拝出席者に高齢者が多くなくなってきたとき、説教時間の問題は一考に値する問題であろう。週に一度1時間ほどの“長い”説教を聞くよりも、日曜日とそれ以外にもう一度、計2度それぞれ半分の時間の説教を聞く機会を設ける・勧めることは有益であろう。仕事から離れた方々の場合、比較的時

間があることを思えば十分にあり得る。聞き手が若年層の場合にも同じようなことが言えるように思われる。

以上は、大学での講義に求められている問題を挙げ、それらについて《コミュニケーション》と《トランスフォーメーション》において一定の同質性を有する《説教》に適応させて考えてみた。但し、一般的な《講義》と《説教》には根本的に異なる面があることを十分に踏まえた上ででなくてはならぬのは自明のことである。

III. Sermon, Homily, Preach(ing) の原義から

a. sermon の原義

教職者によって礼拝等で聖書に基づいてなされる説話を意味する sermon は、ラテン語の *sermō* (=discourse: 講話・講演/談話・論議) に由来する。さらに、それは同じくラテン語の *serere* (=to join together) と関連をもつといわれる。そうしたことから、元々の sermon は conversation 形式、すなわち《question and answer》のかたちをもったものであったと想像される⁸（その後《モノログ》に変わっていった）。

一方、Sermon は近代語の用法として、関心のない聴衆に対してなされ、大きな苦痛を与えるような長ったらしいスピーチを揶揄して使われることもあるらしい。

ここから読み取れることは、説教には「聞き手」との対話的要素があった点である。説教を聞く者がその場で説教者に質問をすることはなかなか想定しにくいことであるが、講義においてはあり得ることである。説教者は聞き手に文字通り“語りかける”思いをもって語り、聞く者から声に出さなくても“応答”が生まれてくるよう語るべく努めることが重要である⁹。そのよ

⁸ 聖書には sermon が対話・問答なしのスピーチとしてなされたケースもあるとされる。モーセの説教（申命記1-33章）、イエスの山上の説教（マタイ5-7章）、ペテロコステ後のペテロの説教（『使徒の働き』2:14-40）

⁹ キング牧師の説教には、聞き手から“合の手”がタイムリングで入ることと、

うな場合にこそ、「伝達」、「コミュニケーション」が成り立つのである¹⁰。

仏教の「節談説教」では、「聞き手」との《競演》的な要素が見られる¹⁰。節談説教は主として浄土真宗で伝承されてきた布教法で、言葉に節をつけ語る（語う）、情に訴える説法である。今はすたれてしまったが（近年復活させる動きがあるらしい）、かつては布教使（僧侶）が、「高座」（高さ1 m以上ある台の上に畳を敷いたもので、文字通り高い座であった）に正座して説法するというものであった（ちなみに、この高座の節談説教から面白おかしい話術の部分が、「落語」になったらしく、落語関連用語に高座があるのはその所以である）。また、節談説教の間には、ありがたいと思われるところで、合いの手のように、聞き手が一斉に念仏を称える「受け念仏」と言われるものが湧き起こることがあるとされる。

また、仏教では、釈迦が行った説法として、聞く者それぞれの心の状態、求めるもの、理解度に応じて、説を変化させながら説くという「待機説法」を尊重する風がある。但し、この場合「方便」という要素も出てくるので、キリスト教宣教にはなじまない。

b. homily の原義¹¹

sermon とほぼ同じ意味を持ち、カトリック教会、英国教会、東方正教会で使用される homily (a commentary that follows a reading of scripture) はラテン語の homilia、ギリシア語 *homilia* (*homios* «等しい、似た» + *hōmē* «グループ») に由来し、《assembly, converse, sermon》の意をもつ。さらにこれを順次溯れば、

臨場感に満ちた雰囲気を感じられる。参照『真夜中に戸をたたき〜キング牧師説教集』(日本キリスト教団出版局、2007)

¹⁰ 身近なところでは、関山和夫『説教の歴史—仏教と話芸』(岩波新書、1978) を参照されたい。

¹¹ 新約聖書に登場する *homilia* のもっとも原初的な用法は《人ととの関係、会話》の意で、1 コリント 15 : 33 *μη πλανᾶσθε, φθείρουσιν ῥη χρηστὰ ὁμιλία κακὰ*. 「思い違いをしてはいけません。友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます」(新改訳)。「思い違いをしてはいけません」。「悪いつきあいは、良い習慣を台なしにする」のである(新共同訳)、ルカ 24 : 14 *καὶ αὐτοὶ ὁμιλοῦν πρὸς ἀλλήλους περὶ πάντων τῶν συμβεβηκότων τούτων*. 「そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた」である。

homilos "an assembled crowd", *homion* "together" となり、原義は《共に集まった群衆》で、《集会》、そこでの《話し》ともなった。

「説教」に通ずる、宣教にかかわる話という意味では、使徒の働き 20 章 11 節「そして、また上がつて行き、パンを裂いて食べてから、明け方まで長く話し合つて、それから出発した」(*ἀναβὰς δὲ καὶ κλάσας ἄρτον καὶ γευσάμενος ἐφ' ἱκανὸν τε ὁμιλήσας ἄχρις αὐῆς, οὗτος ἐξῆλθεν*) に原型がみられる。パウロから信徒たちに対して「パン裂き」をめぐって話がなされたこと、それは一方的なものではなく話し合い(質疑応答が含まれていたであろう)であったことがうかがえる。しかも長時間にわたるものであった。

こうしたことから、ホミリーはもともと古い、対話的な説教形態であった。主イエスがナザレで安息日に会堂に入り、聖書を朗読するため立ち上がり、預言者イザヤの書を渡され、61 章 1-2 節について説教した箇所(ルカ 4 : 16-21) にも見られる。これが使徒や初代教父たちに受け継がれていたようである。初代教会においては、「集会の中での牧者・長老による説教」であった。彼らは説教者としての教育は受けていないが、真理を固く信じてこつとばを弄さず単純・率直に説き明かし、他の者たちからも反応が示され、「語り合い」の場となっていた。この段階では、しっかりと礼拝の中に位置づけられたものではなく、ある種「非公式」なものであった。

それが一般的にはオリゲネスによって「説教形態」に定められていったとされる¹²。それは、聖書の箇所についての「コメンタリー」的なもので、聖書テキストを解説・説明することで、信徒に対し霊的成長を導く機会とすることを目的としていた。さらに徐々に信徒の礼拝の重要な部分となり、キリストが弟子たちに託した使命を果たすべく使徒たちの説教を継承するものとなつていった¹³。

以上 homily の意味・歴史を踏まえ、「説教」という語には《コミュニティ》、《コミュニケーションの場》と結びついていることが明白である。

¹² The Catholic Encyclopedia によれば、オリゲネスは最初 *logos* (sermo) と *homilia* (tractatus) を区別したとされる。

¹³ カトリック教会のミサにおける homily の位置は一般的には、最初の福音書朗読のあととされる(他の方式もある)。

c. preach(ing)の原義

preach a sermon といった使い方がなされる preach は後期ラテン語の *predicare* (to proclaim publicly, announce) から派生し、それはラテン語の *prae* «before» + *dicare* «to proclaim, to say» から成り立ち、「前もって言う」が原義である。予言或いは預言に通ずる意味、公言、宣言、告知に通ずる意味が想起され、それが福音を《広く・大胆に宣べ伝える》といった意味に通ずることがうかがえるが、この点は重要である。なぜならば、そこには、単なる説話・講釈ではなく、明確に「対象（聞き手）」を意識し、「伝える」べき内容をはっきりと、完結型の形で「告げる」ことが示されているからである。

これら三種のことばの原義を考慮に入れてみることも、「説教」は誰に対してなされるか、「聞き手」をどのように意識して臨むかの問題を深く思う点で有益であろう。

IV 説教の「聞き手」の“環境”の変化（文化状況との関係）

最後に、教会の礼拝で信徒に対してなされる「説教」において、「聞き手」に関連する論点を考えてみたい。ロイドジョーンズは『教会とは何か』¹⁴のの後半部「説教とは何か」で、現代における説教 (preaching) の衰退を憂いつつ、preaching が成り立つための問題を指摘している。ここでは、直接的には説教者の側に焦点が当てられているが、同時に現代において説教が衰退した文化的背景について鋭い分析をしている。その点から説教における「誰に」の問題をも感じとりた。

ロイドジョーンズは「preaching の全概念が後退し、奥へ引っ込んだ」と述べ、具体的に《軽い話》を静かに語る風潮、ラジオやテレビといったメディアとの関連で説教に非人格的要素（会衆との直接的接触がない）が入り込んできたこと、《語的内容》より《語り方》に重点が置かれるようなエンタテイン的な要素が幅を利かせていること、カウンセリング的な要素が求められていること、出

出版物による「説教」の代替性の問題などを挙げている。

これらは現代の文化的風潮とその影響が「説教」に好ましからざるが故に及んでいるという指摘であろう。その場合「語り手」も「聞き手」も同じ環境にある以上、同じように影響を受けるのであるが、基本的には「語り手＝説教者」は「聞き手＝信徒」に包含されており（「語り手＝説教者」は他の場面では「聞き手」になるが、「聞き手＝信徒」が「語り手＝説教者」になることは稀である）、且つ「聞き手」である信徒のほうが一般文化の影響を受けやすい《場》に身をおいていることから、「聞き手＝信徒」が受ける影響に「語り手＝説教者」が対応するからで影響を受けることになると考えた方がよいであろう。

そうした意味において、説教者は《誰に》の対象者である「聞き手＝信徒」が無意識のうちに受けている文化的影響を十分に考慮しなければならない。「聞き手」である個人の信徒だけでなく、社会の様相をも《誰に》の問題とからめて考えなければならない。いわば、説教者は「社会（的風潮）」を相手にしていることを意識し、どのように心構えをするかが大切であろう。今日「聞き手＝信徒、未信徒」そして「話し手＝説教者」が曝されている文化的影響のうち特に大きな問題は、《倫理観の希薄化》と《人間関係の危うさ》ではないかと思われる。「福音を語る・伝える」際に「誰に」の問題として考慮する必要がある。

また、ロイドジョーンズによれば、preaching はたとえ聖書に関するものであっても、自ら簡単に語るものではなく、神により遣わされ、恐れおののきつつ行うものであって、その時に語ることは“完結”するもの（完結しない形で続きを次回に回すものは否定される）とされる。もちろん講義的なものは退けられる。sermon が preaching にならなければならないとし、後者は“人格を通して伝達された真理”（フィリップス・ブルックスの定義）であり、そのためには説教者の全存在、すなわち全身体・全器官・全能力・全人格の動員が必要であること強調している。そして、「語り手」たる説教者と「聞き手」たる聴衆の一致、両者の間に行ったり来たりする「相互作用」があることが preaching の本質だとする。さらに、徹底的に聖霊への期待が求められる。

もう一点大切なこととして述べるのは、筆者も上に示したように、説教者は説教する者であると同時に「聞き手」でもある（説教者は自身を含めて聞き手に向かって語るということであろう）ということである。

¹⁴ロイドジョーンズ『教会とは何か』（鶴木由行訳、いのちのことば社、2005）

が損なわれてはならない。ただ、現代の社会状況、その上に築かれている生活の現実に対応せざるを得ない問題も多々ある。いずれにせよ、説教により福音が宣べ伝えられることにおいて《コミュニケーション》の要素が成り立つことで「聞き手」のうちに《トランスフォーメーション》が起り、喜び・感謝・恵み・確信や回心に導かれることが求められる。

結びにあたって、現代の社会状況からして《誰に》に関して浮かぶことをあげておきたい。社会的格差の増大に伴っていわゆる社会的弱者が増加している今日、金銭面、身体面で困窮している人たち、人間関係に悩み、弱さを覚えている人たちが伝道説教の《誰に》の中で位置づけられるべきであろう。

主イエスの宣教の対象は病人や悪霊にとらわれた人たち、病氣その他で差別され悲しんでいる人たち、希望を失っている人たち、罪びとであったことをわれわれはしっかりと常に胸にとどめておかねばならない。まさに「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です」(マタイ9:12)、「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」(同9:13)である。

近年研究が進んでいる4世紀のカッパドキア教父のナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオスにおいても語る対象として貧者・病者が強く意識されていた¹⁵ことを想起したい。

(中京大学教授、中部部会理事長)

結び

《説教》を《誰に》と結び付けるときには、さらに《何を》をも含めなければならぬだろうが、われわれにとってはそれが《福音》であることははっきりしており、その文脈においては《誰に》も明確である。《すべての人に》ということであろう。ただ、sermon, homilyの意味から導かれたように、集まってきた人たちに直に語られる場合から、聞いてもらいたいと呼びかけて語る場合がある。主として礼拝説教は前者であろし、伝道説教は後者であろう。その場合、ある程度は既に信仰をもっている人たちから、未だ信仰をもっていない人、それほど関心があるわけでもない人たち、信仰に対して否定的な立場の人たちまでさまざまである。その意味で《すべての人》となるのである。

そのうえで言えることは、主たる対象者(聞き手)がある程度同質の場合は語りやすい。語り方も決めやすい。しかし、混在している場合は難しい。教会の礼拝での難しさもある程度そこに起因している。そこで《いかに》という問題が生じてくる。また、さまざまな工夫や場合によってはテクニク或いは補助的媒体の使用が模索される。しかし、そこには落とし穴があり得る。つまり、それらを考えるあまり《何を語るか》が変形・変種あるいは希薄化する恐れがある。

これまで検討してきたことは、説教に関して《コミュニケーション》《トランスフォーメーション》を加味して考えるとき、「聞き手」が「語り手」の説教において、両者の間にあるべき姿、語られた結果として《起こるべきこと》に焦点を合わせたものである。説教者は「語り手」として、「聞き手」の心に応答があるように語らなければならないし、聞いたあと結果として「聞き手」のうちに《変化》が起り、《トランスフォーム》されることを祈りつつ臨まなければならない。その際に念頭に入れておいた方がよいと思われることを《コミュニケーション》《トランスフォーメーション》をキーワードに伝達行為という点では共通性のある大学等での講義が直面する問題点を挙げながら考えてみた。

しかし、最後に強調しておきたいことは、それらはすべて《配慮》あるいは《意識》であって、決してそれらが満たされればそれでいいというものではない。論点から浮かび上がったことを意識に入れ、それらに配慮して説教に臨むことは必要であるが、配慮にとらわれることで、本来のpreachingの姿・力

¹⁵ 土井健司『司教と貧者—ニュッサのグレゴリオスの説教を読む—』(新教出版社、2007) 同「ナジアンゾスのグレゴリオスとレプラの病貧者—第十四講話における救済思想」(『関西学院大学キリスト教と文化研究 12』)